

# Google サイトを活用した学修記録への挑戦と今後の課題

江原 数彦・白川 はるひ・中村 公子・吉川 尚志・苗村 晶彦・村木 桂子

総合教養センター

## はじめに

令和4年度における本学科目「戸板ゼミナール1」の新しい試みとして、467名（4月1日付）の学生に対し、「Google サイト」への活動記録の指導を行った。この試みは教学マネジメント上では、文部科学省が唱える「学修成果の把握・可視化」<sup>1</sup>の実現に向けての総合教養センター<sup>1</sup>における第一段階の取り組みである。また、これを学生においては以下の価値を持てるよう、総合教養センターにおける指導の指標とした。

- ・自身の活動が見える形で記録に残すことにより、実績を自認しやすくする。
- ・就職活動時の「ガクチカ（学生時代に力を入れたこと）」の参考資料にする。
- ・就職活動時、企業に活動をビジュアル的にプレゼンテーションすることに活かす。

このような二側面からの価値づけをして本取り組みは実施されたわけだが、科目指導を終え、教学マネジメント上においても、学生指導上においても課題が残された。

本稿では、「学修成果」およびその「可視化」とは何かを再確認し、「Google サイト」活動記録の実践報告を行いながら指導における過不足を考察し、今後の「学修成果の可視化」に向けての課題提起となることを目的とする。

## 1. 学修成果とは

### 1-1. 「学修成果」および「学修成果の可視化」の定義

今回の「Google サイト」活動記録の取り組みは、「学修成果の可視化」を目的とするならば、その目的を成し得るための目標の一つである。活動記録をすることが即ち「学修成果の可視化」の達成ではない。あくまでも「可視化」を実現するための一つの方策あるいは手段である。これを明確にするために、まず、本稿で扱う「学修成果の可視化」の定義を明らかにする。

文部科学省「教学マネジメント指針 用語解説(案)」<sup>ii</sup>（2019）によると、まず、「学修成果」とは、学習者自身が理解し実演できるようになった内容そのものであり、それは学修目標との対応関係にあり、またその学修目標は測定や評価が可能なものでなければならないと説明されている。

また、この学修成果の「可視化」については、同資料にて第三者から見ても理解できる形と表現され、また対外的にわかりやすく表示されたものとも述べられている<sup>iii</sup>。こうした点を踏まえ、学修目標を達成するまでの学修のプロセスや評価・成果などの情報を元に、その学修の意味と内容を学習者自身が深く理解し、その集められた情報を第三者が見ても理解できる形に表示することを本稿における「学修成果の可視化」の基本定義とする。

<sup>1</sup>戸板女子短期大学において、教養と知識を身につけ、自主的・総合的に判断し行動する能力を養うために設けられた「総合教養科目」を運営・管理し、幅広い学修支援を行う部署。

## 1-2. 「学修成果の可視化」と「戸板ゼミナール1」の関係

この「学修成果の可視化」は、教学マネジメント上においては、以下の行程の中に位置づけられる。

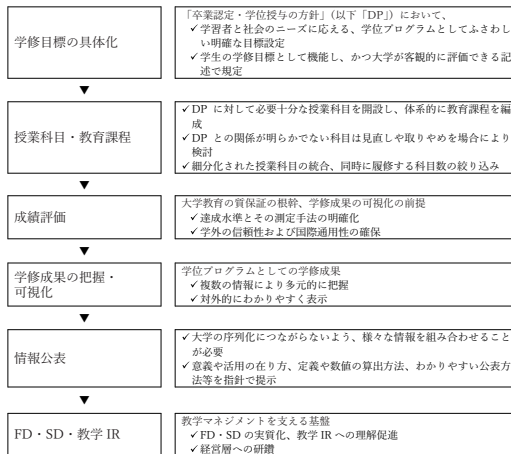


表 1-1 教学マネジメントの行程<sup>\*)</sup>

「戸板ゼミナール1」は上記行程の「授業科目・教育課程」に位置し、Google サイトの学修記録課題は、次行程である「成績評価」に向けての達成度を測定する、一つのツールの役割を担っている。また、この学修記録は、同時にその先にある「学修成果の把握・可視化」の行程において、成績評価の一素材としてのエビデンスを「対外的にもわかりやすく表示」という役割も併せて持っているともいえる。

## 2. 「戸板ゼミナール1」における活動と学修記録への取り組み

### 2-1. 「戸板ゼミナール1」の授業計画

「戸板ゼミナール1」は、本学における総合教養科目の基礎科目(必修)として、1年生前期に開講されている。企業からビジネス上の課題提示があり、問題解決型学習と協働学習を軸に、チームワーク力・思考力・判断力を養い、主体性や責任感を伸ばすことを目的とした科目である。本年における企業からの課題は以下のとおりである。

- 服飾芸術科 株式会社 WEGO より「「T 層」中・高生(12~18才)が WEGO 店舗でショッ

ピングしたくなる仕掛けを考える」

- 食物栄養科 株式会社コロワイド(フレッシュネスバーガー)より「大人のバーガーカフェにふさわしい20代向けの商品提案」
- 国際コミュニケーション学科 株式会社アイグリッツより「超十代、私たちならこうプロデュースします」

こうした課題の解決に5人前後のグループで取り組み、調査・企画立案し、企業に向けて発表を行った。企業が優秀と採択をしたグループの企画に対しては、商品化や企画の実現をするという内容である。優秀グループの選出は企業によるもので、選出材料はプレゼンテーションの内容およびその資料である。今回の Google サイトにおける学修記録内容はその対象とはなっていない。

なお、授業は表 2-1 のとおり計画され、実施された。

| 回  | 実施日   | 授業の内容   | 活動記録対象<br>●:学修記録対象科目 |
|----|-------|---|----------------------|
| 1  | 4月7日  | 学長講話・戸板ゼミナールオリエンテーション                             |                      |
| 2  | 4月14日 | Google サイトの使い方・記録方法、課題発表                          |                      |
| 3  | 4月21日 | 企業からの課題説明/質疑応答・個人ワークの進め方                          | ●                    |
| 4  | 4月28日 | グループワーク(個人ワークの発表→グループ案の決定→改善ポイントの発見)              | ●                    |
| 5  | 5月12日 | グループワーク(課題の再確認・ターゲット顧客理解・ペルソナ作り)                  | ●                    |
| 6  | 5月19日 | グループワーク(ベースとなる企画案の掘り下げ・競合調査)                      | ●                    |
| 7  | 5月26日 | グループワーク(販売促進・宣伝・価格設定)                             | ●                    |
| 8  | 6月2日  | グループワーク(発表シナリオ/スライドの作成)                           | ●                    |
| 9  | 6月9日  | グループワーク(発表シナリオ/スライドの作成)                           | ●                    |
| 10 | 6月16日 | グループワーク(予選のためのプレゼン練習)                             | ●                    |
| 11 | 6月23日 | プレゼンテーション大会 予選                                    | ●                    |
| 12 | 6月30日 | 予選までの活動の振り返り/Google サイトのまとめ方について                  |                      |
| 13 | 7月7日  | 予選非通過学生:外部講師による講演(産学連携外)<br>予選通過学生:決勝に向けてのグループワーク |                      |
| 14 | 7月14日 | 決勝大会(予選通過学生グループのみプレゼン)                            | ●※予選通過組のみ記録          |
| 15 | 7月21日 | 最優秀グループのプレゼン披露・活動の振り返り                            |                      |

表 2-1 戸板ゼミナール1 授業計画

最優秀グループを決定する過程は2段階に分けて行われた。第一次選考(予選)で各学科6グループから7グループに絞り込み、第二次選考(決勝戦)で「最優秀賞」1グループ、「優秀賞」2グループを選出した(以下予選を通過した学生を「予選通過学生」、予選を通過しなかった学生を「予選非通過学生」と記載)。

## 2-2. Google サイトにおける学修記録の内容

学生たちが Google サイトに記すべき「戸板ゼミナール1」での学修内容は、表2-1にある授業計画のうち、第3回目から第11回目、第14回目が対象となる。予選通過学生は第3回目から第11回目と第14回目の10回分、予選非通過学生は、第3回目から第11回目の9回分の記録を義務付けた。

学修記録の仕方は、サイト上である程度の「型」(図2-1、図2-2)を提示し、それに倣って毎時記録を追加するよう指導を行った。



図2-1 サイトの完成見本

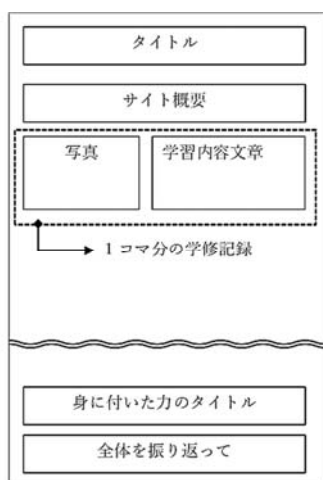


図2-2 レイアウトの型

## 2-3. Google サイトへ記録を残すための授業時の指導について

学生に対する Google サイトへの記録の説明は第1回オリエンテーション時に行った。学生には「学習の記録を残すことで自己の実績を自認するため」、および「就職活動時のガクチカ(学生時代に力を入れたこと)へ活用するため」に記録を行うものであると説明した。記録のメディアとして使用される、Google サイトの使用方法については未学習の学生が多いため、第2回の授業にて、その操作方法の指導を対面・オンラインのハイブリットにて行った。

この段階での操作において、マッキントッシュ OS を使用している学生のうち、Google Chrome を使用していない者(複数)にエラーが生じた(文字が入力できないという現象が起きた)。しかしながら、Google Chrome をダウンロードさせ、そこから Google サイトに接続させることで問題は解消された。その他には大きな問題や質問が出ることはなかった。

さらに、授業時における記録指導は、総合教養センター教員の学科別担当者が授業毎時に、記録への促進を「言葉かけ」によって行った。

## 2-4. Google サイト記録を残すための随時個別指導について

授業における一斉指導のほかに、個別操作支援も行った。個別操作支援の形態は次のとおりである。

- 総合教養センターへの自主来訪者に対する指導  
操作方法について総合教養センターに質問に来た学生に対し操作方法の支援を行った。これは2名の助手を中心に適宜行われた。
- キャンパスアドバイザー<sup>2</sup>からの操作支援および記録への促し

一部のキャンパスアドバイザーは、記録を怠っている学生に対して、総合教養センターを訪問させる、あるいは自ら操作の方法を教えるなどして、記録の促進を図った。

- TOITA Activity での指導

本学では「TOITA Activity」と称し、授業外での様々な学習機会を提供する「時限」を火曜日と木

<sup>2</sup>学校における様々な生活相談対応や、出欠・履修状況を把握し、スムーズに学修が進められるよう支援活動を行うアドバイザーのことを本学ではキャンパスアドバイザーと呼ぶ。

曜日の16時30分～18時にて設けている（令和4年度現在）。この TOITA Activity を利用し、「Google サイト支援セミナー」を4回開催したところ12名の学生が参加した。内訳数は以下のとおりである（表2-2）。

| 実施日   |   | 服飾 | 食物 | 国際 | 合計  |
|-------|---|----|----|----|-----|
| 6月6日  | 月 | 1  | 2  |    | 3名  |
| 6月7日  | 火 | 1  |    |    | 1名  |
| 6月13日 | 月 |    | 5  | 1  | 6名  |
| 6月14日 | 火 | 2  |    |    | 2名  |
| 合計    |   | 4名 | 7名 | 1名 | 12名 |

表2-2 TOITA Activity 「Google サイト支援セミナー」  
参加人数一覧

### 3. Google サイトを学習記録ツールに採用した背景

#### 3-1. Google サイトとは

Google サイトとは、Google LLC（グーグル合同会社：以下グーグル社と記載）が開発・提供している Web サイト作成ツールである。「社内プロジェクトのハブサイト、チームサイト、一般公開のウェブサイトなどを、デザイナー、プログラマー、ITスタッフの力を借りずに構築」できるもので、グーグル社が教育機関に提供している Google For Education のパッケージに含まれているひとつのアプリケーションである。そのため、本学のメールアドレス（ドメイン）保持者であれば、無料で使用できる。

具体的には、すべて自由に作成できるものではなく、初心者向けにある程度フォーマットが定められている。操作の簡易性が高い分、デザインなどを自在に変更することには向いていない。

また、公開範囲を「一般公開」「限定公開」「未公開」と選ぶことができ、未公開におけるデータは、オーナーである学生が選んだ特定者と共有することができる。

#### 3-2. 記録ツールとしてのメリットとデメリット

「戸板ゼミナール1」における「Google サイトを活用した学修記録」を通して、Google サイトを

記録媒体として選択した場合には以下のメリット・デメリットがあるという知見が得られた。なお、これはあくまでも学修記録として使用した際のメリット・デメリットであり、アプリそのもののメリット・デメリットではない。

<メリット>

- サイトを作るために新たなサーバの設定が不要である。また URL 作成も簡易である。そのためサイトを開設する際の学生の負担がない。
- Google For Education の基本セットとなっているアプリであるため、無料である。
- サイトデザインにおいて、写真や文字を配置する際は、アプリ内の作成ボタンをクリックし、場所を設定するだけで済み、数ある Web 制作系アプリの中でも、より簡易に操作できると判断できる。
- 学生が本学教職員を共有者とすることで、教職員が学生の記録内容を随時確認できる。本学ではキャンパスアドバイザーが学生一人ひとりに割り当てられているため、各学生はデータ共有者をキャンパスアドバイザーに設定し、キャンパスアドバイザーは共有者として定期的に学生の記録内容を確認することができる。
- 変更履歴を表示することができるため、学生がいつ記録を残す作業に取り組んだのかを、教職員が確認できる（図3-1）。



図3-1 Google サイト 変更履歴画面に注釈をつけたもの

- 初年次学生のパソコンスキルのアップに貢献できる。Google サイトの編集はパソコンでしか行えないため、学生はパソコンで作業をせざるを得ない。本学では本年度（令和4年度）より、学生所有のパソコンを授業時に活用する BYOD 化に取り組み始めたことと併せ、スマートフォンでは代替がきかない Google サイトであるからこそ、より多くの時間、パソコンに触れてもらう機会を提供できた。

<デメリット>

- Google For Education であるため、卒業してしまうと利用および閲覧ができなくなる（ただし、在学時に自身の別の Google アカウントとデータを共有し、その別アカウントにてコピーを作成すれば、卒業後も作成データは保持できる）。
- 編集操作はパソコンのみ可能であり、スマートフォンで編集できない。
- オーナーである学生が共有設定あるいは公開設定をしない限り、教職員は学生の記録データを確認できない。
- 一定のデータ量を超える画像、そして動画は Google ドライブを経由してサイトに配置するシステムを取っているため、ドライブに素材となる画像や動画をアップしなければならない。しかしながら学生はクラウドにおける「ドライブ」の認識が低いため、「ドライブ」の教育を併せて行う必要がある。
- 学生がスマートフォンで撮影した画像データを、Google ドライブにアップする「理屈」を理解するまで、一定期間を要してしまう。操作方法に関してはすぐに習得できるようになるが、必要な画像をスマートフォンからドライブにアップさせる「行程」を忘れてしまいがちである。

なお、以上のようなメリット、デメリットは指導前よりすべて想定していたわけではなく、指導しながら判明していった部分が多い。こうしたツールのメリット・デメリットはありながらも、今回の挑戦を通して、使用前には気付かなかった指導上の課題や、学修傾向を探る上での多くのヒントを得ることができた。

次の項目からは、Google サイトへの学修記録を通して、学修記録の傾向が読めるデータを学科ごとに紹介し、学修記録指導上での課題を明確にしていきたい。

#### 4. 学修記録の実施結果報告

この章では、Google サイトへの学修記録の実施結果報告を、学生の「量的」な記録実績と、「質的」な記録実績の2面から報告する（学生に示した記録

すべき内容に関しては、第2章第2節を参照のこと）。調査対象は1年生履修者467名中、分析対象母数は431名である。履修者数より分析対象母数が少ない理由は、記録を追える学生（キャンパスアドバイザーと共有設定をしている学生、キャンパスアドバイザーが記録を残している学生）が母数となっているためである。

データにおける「量的」な記録実績は、2つの観点から分析を行った。第一の観点は、学生が記録をした授業の回数（コマ数）に着目し、規定回数中何回（何コマ）分記録を Google サイト上に残しているかを測った。第二の観点は、記録のタイミングに着目し、全期間中、毎授業後に記録を行っている人数を変更履歴から調べ、この人数の推移から学生の行動特性を探った。いつ、学生が記録行為を行ったかは、Google サイトの機能の一つである変更履歴を確認することで求められる。第二の観点における調査対象は、履修者のうち総合教養センターに所属するキャンパスアドバイザーが担当した学生69名とした。なお、変更履歴の記録を測るルールとして、授業1回分の記録にとりかかる猶予の期間（ターム）を「戸板ゼミナール1」の開催曜日時限（木曜13時）より次の週の授業開始直前（木曜12時59分）までとした。1ターム内に何人の学生が記録行為を行ったかを計測目的とするため、一人が1ターム内に複数の記録行動をとったとしても（変更履歴が複数残っていたとしても）「1」、記録行動をとっていなければ（変更履歴がなければ）「0」とカウントし、タームごとの行動履歴の有無を単純化した。

一方「質的」な記録実績とは、記録の内容実績である。記録に記載する必須項目をどこまで満たしているのかという点に着目し、分析を行った。

#### 4-1. 学生の記録達成度（量的な記録分析）

##### 4-1-1. 服飾芸術科

学習者の記録の回数においては、予選通過学生で規定回数以上の記録を残したものは該当学生数26人のうち15人の58%の割合となった（以後この割合を「目標達成率」と記載）。一方、予選非通過学生の目標達成率は、該当学生数161人のうち142人の86%の割合となった。学生個体の記録回数を示す「図4-

1. 服飾芸術科学習記録回数散布図」からもわかるように、多くの学生が規定の回数を満たしている。

予選通過学生の目標達成率が低い理由は、予選通過学生も9回までの達成者は23人おり目標達成率は88%と高く維持されていることから、以下の2点であると推察した。

- ・予選通過後に発表スライドの修正やプレゼンテーションの修正など決勝に向けての準備に時間が追われたこと。
  - ・決勝終了後に学修記録締切日が設けられていたことや周りの多くの学生（予選非通過学生）がすでに記録作業を終えてしまっていたことから学生自身のモチベーションが低下したこと。
- 次に、学修記録のタイミングを全記録期間中の回

ごとの記録者数の推移である「図4-2. 服飾芸術科 授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化」を参照し考察する。

抽出した学生個体数35人の結果、最も更新が多かったのは「6/30～」の32人であり、全体の91%を占めた。次いで、初回「4/14～」の30人（全体の86%）となった。3番目は、「4/28～」の16人（全体の46%）であり、「6/30～」および「4/14～」の更新に較べてその更新の人数は大きく低下した。「4/14～」および「6/30～」の回は、それぞれ授業内でGoogleサイトの解説時間を設けた回である。特に「4/14～」の回はサイト作成の初心者が多いため丁寧に説明したことと、入学直後で、学生には緊張感がある時期でもあり、これが数字を伸ばした

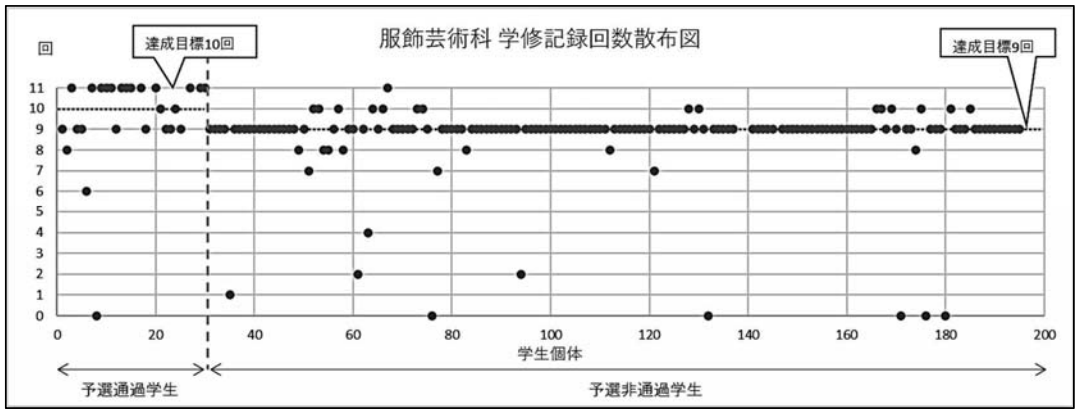


図4-1 服飾芸術科 学修記録回数散布図 ※グラフの学生個体番号と学籍番号との関連性は一切なし

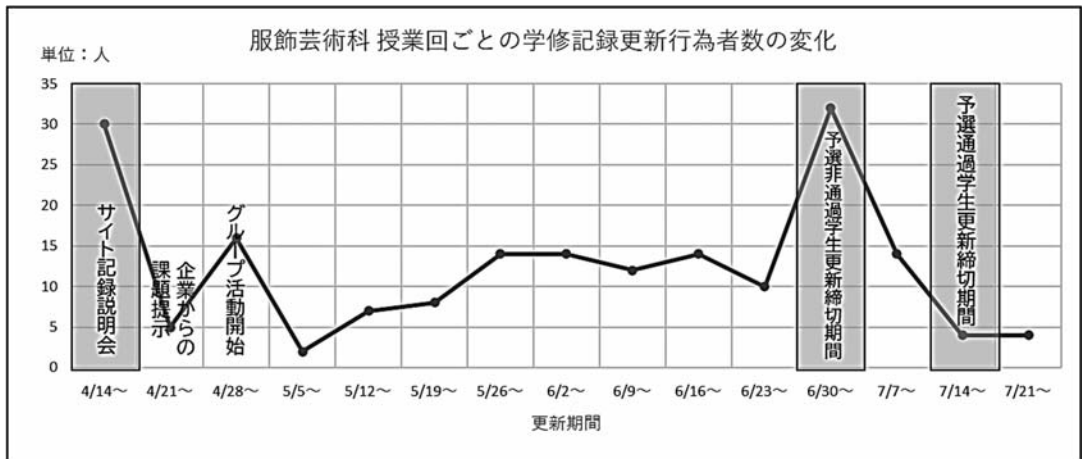


図4-2 服飾芸術科 授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化

原因と推察される。「6/30～」の授業は、「以前から伝えていた通り次週はサイト提出の締切日である」ということをあらためて告げた回で、Google サイトを完成させるための方法を動画で示し、さらに授業内でサイト作成の作業時間を取ったことが要因と考えられる。また学生個体の動きを見たところ、この期間で更新頻度が4回という学生もおり、締切に向けて一段と学修頻度が高まった結果と考えられる。3番目の更新人数となった「4/28～」の授業では、PowerPoint 資料に「サイト記録をすること」と提示し、口頭で軽く促しただけであったのだが、それでもサイト更新者数が増えている。考えられることは、この回からグループ活動が始まったため学生同士で情報交換が行われ、サイトについてわからないことを教え合うということがあった可能性がある。

「4/14～」を除く「6/30～」および「4/28～」以外にも、前週に比べて緩やかではあるが上昇が見られたのが「5/26～」の授業である。この授業は「サイトの作成が単位に関わる」と初めて学生に伝えた回であった。加えて「サイト作成支援セミナー」の案内も行い、PowerPoint 資料についても4ページを割り、課題の支援として全6回のセミナーを開講する旨を伝えている。

以上のことから、①教員から強くメッセージが送られたとき（「4/14～」、「6/30～」）、②成績に関わると学生が自覚したとき（「5/26～」）、この2つが数字の上昇と深く関わっていることがうかがえる。

また、推測の域を出ないが、友人同士での情報共有・教え合い（「4/28～」）という協働作業も、更新数上昇の原因になる可能性がある。

①教員から課題の説明がされたことで学生の意識が高まること、②成績に関わると学生が認識したとたん課題に力が入る、などは比較的容易に推察できるが、協働作業による効果については今回新たな気づきとなった。今後どのような形態で課題を提供するかという点からも、留意すべきことである。

また、各学生個体による更新行為回数については、2～10回と個人差が強く表れる結果となった。更新数が最高の10回の学生は2人（全体の6%）いたが、ほぼ週に偏りがなく、授業毎に着実に更新していく傾向が確かめられた。一方、最低の2回の学生のケースでは、更新が初回と15回目（「7/21～」）のみであり、途中一切行っていないことも明らかになった。今回、キャンパスアドバイザーという新たな試みの中、「声かけ」もあったことで更新回数が増えた学生もいたことが推測されるが、学生の課題取り組みの意欲促進のためには、例えば途中段階の Google サイトを学生自身に発表させるなど授業デザインを考えていく必要がある。

#### 4-1-2. 食物栄養科

学習者の記録の回数を見ると、目標達成率で見るところ、予選通過学生は、該当学生数33人のうち24人の73%、予選非通過学生、該当学生数116名のう

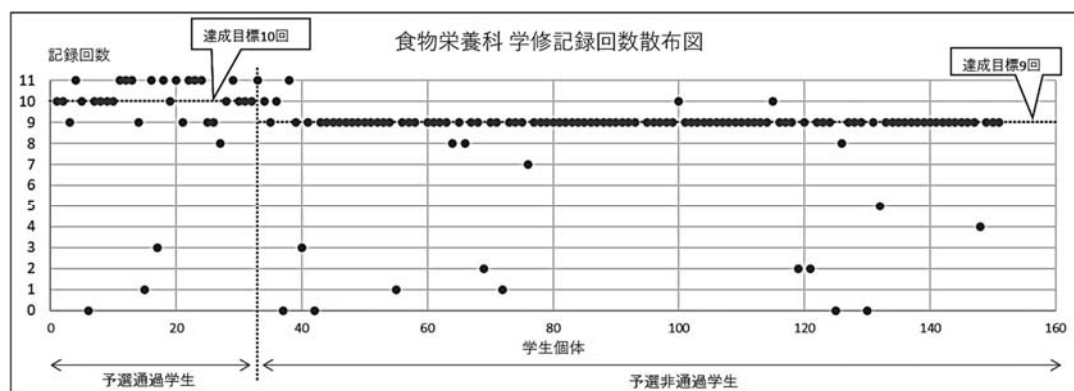


図4-3 食物栄養科 学修記録回数散布図 ※グラフの学生個体番号と学籍番号との関連性は一切なし

ち100人の86%の割合となった。学生個体の記録回数を示す「図4-3. 食物栄養科学修記録回数散布図」からもわかるように、多くの学生が規定の回数を満たしている。全体の特徴としては、予選通過学生の規定回数に対する目標達成率が、予選非通過組のそれよりも低くなったことが特徴である。

こうした学生の学修記録回数を分析する上で、学生と教員がどのような行動パターンで動いたのかを探るために、抽出した学生個体19人の学修記録のタイミングを示した「図4-4. 食物栄養科 授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化」のデータを活用し、それと並行する教員の指導状況を照合して考察した。

「4/14～」の週は、サイトの記録説明会をし、自身の Google サイトを開設（未公開状態）させた週であったため、授業に出席した学生は何らかの行動に出ている。これは学修記録について説明した回であり、Google サイトに触れた学生が多いのは当然である。

「4/21～」の週に関しては、企業からの課題の提示があり、かつ教員側から写真（企業の方が説明をしている写真）の提供があったにも関わらず、約半数の学生しか記録行動をとっていない。その事実が見て取れたため、「4/28～」の回において、学生に対し再度 Google サイトへの記録を行う時間を30分取った。30分の内訳は10分を使い方再説明、20

分を学生の作成時間とした。そのため、授業参加者全員が記録を更新できている。

しかしながら、ゴールデンウィークの週（グラフ上では「5/5～」）をまたいで「5/12～」の回では31%の学生しか記録を残していない状況となった。背景における教員の働きかけとして、前回のように授業中での記録の時間を取っておらず、記録すべき内容のヒントを5分程度提示したのみであったことが要因として推測される。

「5/19～」の回では、記録した学生の割合が19人中11人と57%に上昇している。この回も前回同様、Google サイトへの記録の促しは5分程度で、授業中に作成時間を設けていないにも関わらず上昇した。前回「5/12～」の授業と異なる環境および指導は以下の通りである。

- ・前回授業時に記録の時間を作ってもらえなかったという学生側の経験からか、グループ活動中のメモ機能として、Google サイトへの学修記録を授業内に逐次行っている学生が散見され始めた。後で思い出しながら記録をするのではなく、授業内で書記の役割として逐次記録を行い、規定の内容を満たしていくというタイムパフォーマンスを求めた方法である。特に教員から指導した経緯はないため、自然発生的に学生たちの中から始まったとみられる工夫である。
- ・「5/19～」の回で、TOITA Activity にて Google

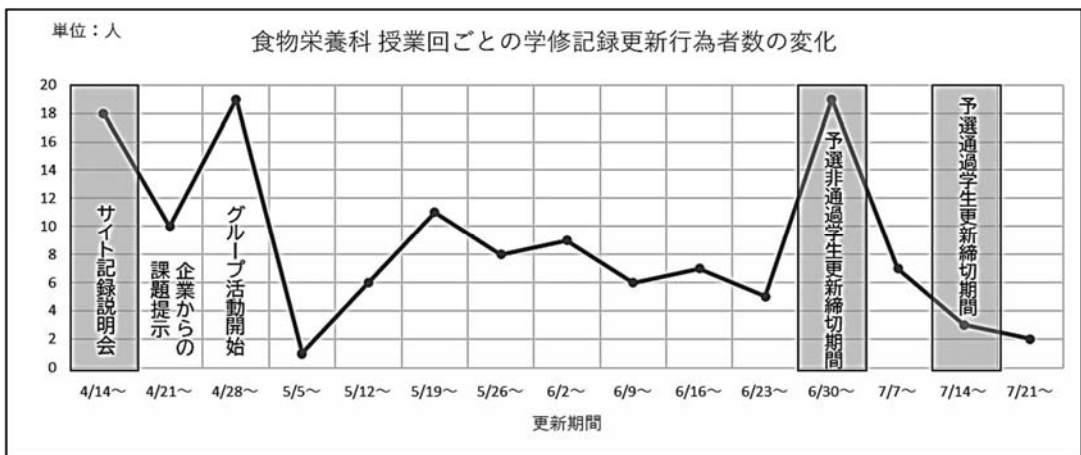


図4-4 食物栄養科 授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化



サイト作成支援の講座を行うことを告知した。その際、講座以外でも Google サイトへの学修記録で不明なところがあれば総合教養センターへ来室してよいことも同時に告げた。

しかし、以上のような環境が存在しながらも、その後しばらくは「6/23～」の週まで若干の上下がありながら記録の人数が減っていった傾向にある。この間の授業背景としては、グループワークの内容が原価・売価計算など高度になったこと、また予選プレゼンテーションのための、スライド制作が課題に新たに入ってきたことが挙げられる。学習の優先順位として計算や資料作成に重きを置くようになったと予測される。さらに6月23日には予選大会（全員が発表する形式）が開催されたため、個々人の意識が発表の方向に大きく傾いた。また、教員側も予選プレゼンテーションに向けての指導に時間を多く取るようになり、Google サイトに対する指導の時間が少なくなった時期であった。

「6/30～」の回では、Google サイトにおける学修記録の最終的なまとめ方の指導を、実際に学生に Google サイトを開かせて30分間行った。また、7月7日が学修記録の締切であることを強調した。締切日直前の回ということもあり、100%の学生が学修記録行動をとった。

以上のことから、学修記録を実践する際には、①授業時に学修記録媒体（Google サイト）を開く機会があること、②ある程度のまとまった時間で教員

から学修記録への指導があること、の2点が学修記録の指導において必要であると推測ができる。さらに更新記録を追った学生の行動の推移からうかがえる特性として、必要な回の記録を毎時行った学生は19名中2名のみであったという事実から、規定を満たす意識が高い学生は多いものの自発的・継続的に学修記録を行う自律性を身に付けた者は少ないことが認められた。

先述した、予選通過者の規定回数への目標達成率が、予選非通過者のそれよりも低めになってしまったのは、こうした本学の学生の特性に対し、予選終了後に①と②の環境を教員が提供できなかったこと、そのことにより学生の学修記録への意識が低下してしまったことが原因と考えられる。

#### 4-1-3. 国際コミュニケーション学科

まずは、分析対象者94名のうち、記録回数の追跡が可能であった92名分のデータから、予選通過者と予選非通過者それぞれの傾向を検証する。結果は図4-5の通りであった（図4-5）。

予選通過学生（分析対象者22人）の記録必須回数は10回であるが、目標達成率は9人の41%である。予選非通過者の規定回数である9回で達成率を求めた場合でも12人で55%であった。既定回数の三分の一以下である3回以下の記録にとどまっていた学生は8人で予選通過者の36%の割合でいた。一方、規定回数10回を超えて11回を記録している学生は9人

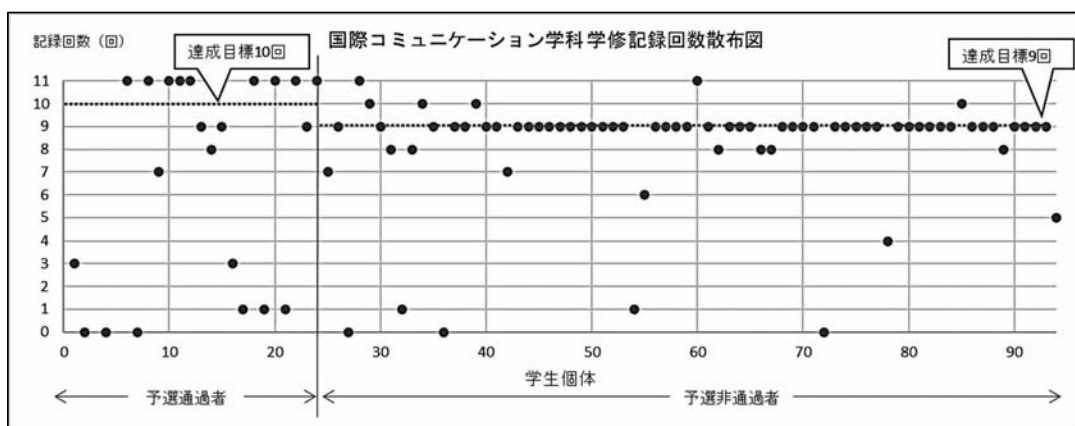


図4-5 国際コミュニケーション学科 学修記録回数散佈図 ※グラフの学生個体番号と学籍番号との関連性は一切なし

おり41%いた。

予選非通過学生（分析対象者70人）は規定回数9回以上の記録がある学生は54人で77%、3回以下は5人で7%であった。9回を超え、10回あるいは11回を記録している学生は6人で9%いた。つまり、目標達成率は、予選非通過学生が予選通過学生の倍近く高く、全般的には予選非通過学生の記録回数が安定的に多い。既定回数の三分の一以下の提出を「回数が少ない」とし、規定回数を超えて記録を残した場合を「回数が多い」とした場合、回数が少ない学生の率は予選通過学生の方が5.1倍高いが、回数が多い学生の率も予選通過学生の方が4.6倍高いことから、予選通過学生は、記録回数が多い学生と少ない学生とに分散していることがわかる。

実際に、教員Aがキャンパスアドバイザーとして担当していた3チーム15名の学生を、a（予選通過）、b（予選通過）、c（予選非通過）チームとし、その個々の記録回数と更新行為回数とをグラフ化してみると、以下の図4-6のようになり、記録「回数が多い」学生と記録「回数が少ない」学生は、すべて予選通過グループの学生であった。

ただし、予選通過しているグループaとグループbは特徴が違っていた。グループaは記録回数が多い学生が2名おり、また、必須回数10回に満たない学生が3名いたものの、それらの学生も8回以上は

記録しており、そのうち2名の記録内容は、記録回数が多い学生をしのぐ文章量および内容であった。グループbは4名のうち3名は記録回数が少なく、更新行為回数も3回以下であったが、1名は記録回数11回、更新行為回数9回で、このグループには、記録回数と更新行為回数を乗じて出した数値が最大値になる学生と最低値になる学生双方が存在していた。予選通過グループに記録回数が少ない学生が目立ったことに関しては、企業への企画立案のための話し合い、ワークシート作り、パワーポイント作り等に時間を割き、学習記録が後回しになったためということも場合によっては考えられるが、そのためには、各グループの活動状況データや学生への個別インタビューなど、さらなるデータが必要となるため、本研究ではその部分は明らかにはできない。次に、学生の更新頻度について時系列に沿って検証する（図4-7）。

授業において、初めてこの取り組みについての説明を行った「4/14～」は、授業内で実際にパソコンを操作させながらの講義であったため高い数値からスタートしているのは当然の結果といえる。翌「4/21～」はプログラムの都合上、更新の指示が口頭でのみ行われた。その結果、更新数は半減しているが、それでも作成への取り組みを見せている学生も一定数いることがわかる。「4/28～」からは本格

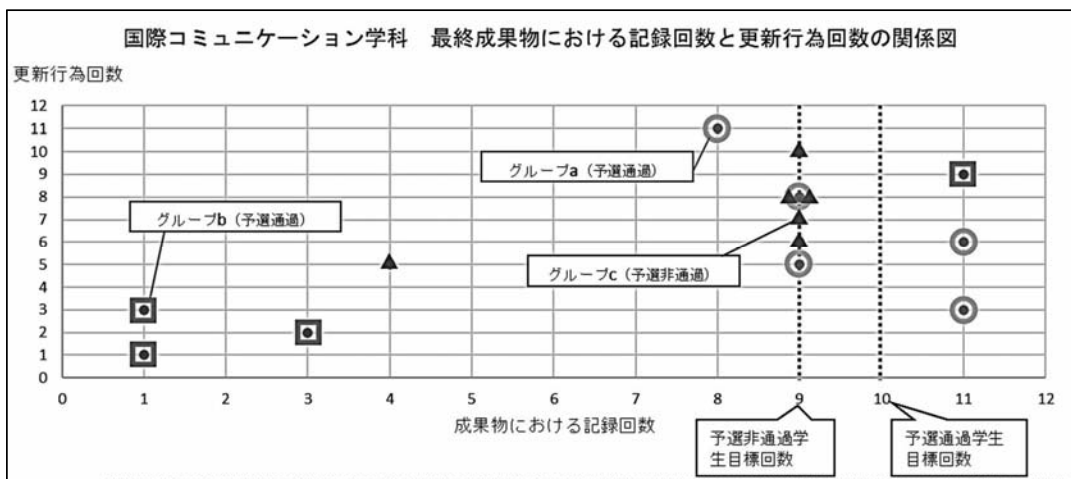


図4-6 最終成果物における記録回数と更新行為回数の関係図

的にグループ活動が始まることとなったが、活動初回のこの日は、慣れないメンバーとのコミュニケーションツールとして Google サイト作成を活用した場面が授業内で多く見られたことから、更新数が上昇している。しかしながら、本格的なグループ活動が始まり、授業内で特別に Google サイト作成の時間を設けることになくなったその後の回は、継続の指示が教員から出ていたものの多くの学生が更新を留めている様子が見て取れる。その原因はパソコンの操作に不慣れな学生の技術面に問題があるのではないかとの予測をたて、「5/19～」以降は授業終了間際に Google サイト作成の時間を設けたほか、TOITA Activity にて Google サイト作成支援講座を実施する告知を出し作業を促した。さらにこの間の5月25日には Google Classroom から複数回に渡る支援日程の配信を行い、実際に放課後等を使って個別あるいは複数人に対する指導も行っている。こうした教員の働きかけから、グラフを見てもわかる通り、「5/19～」の回を含む連続3回は更新数が上向きに推移した。

だが、「6/9～」の回において、急激に記録の更新がされなくなる。これは予選が近づき同時進行でプレゼンテーション用の Google スライドの作成がはじまったことが主要因として考えられる。教員からは、変わらず更新の指示を出していたが、多くの学生にとって Google サイトの記録更新の余裕は

なかったようである。興味深いのは、翌「6/16～」も状況は変わらないはずであったが、この回にて Google サイトの最終提出日を告知すると、それを反映したように更新数が一時的に回復した。6月23日に行われた予選会後、プログラムの振り返りを行った「6/30～」には授業内で Google サイトの仕上げ方の動画を流し、教員指導の下で作成を行ったため高い数値になったのは当然の結果であるといえる。提出締め切りは7月7日であったが、その後も低い数値で更新数が推移しているのは、予選通過した一部の学生に更新の指示が出ていたためである。

以上の結果から読み取れることは、学生が自主的に学修記録を行う際、特にパソコンなど技術的な側面を伴うものをツールとしながら取り組んだ場合は、教員から相応な指導時間もたらされないと、取り組みが難しいということである。授業内やサポート講座など相談可能な教職員が身近にいるときにのみ急激に高い数値が出ているのは、自ら取り組むだけの自信を学生たちが持っていないことの表れといえよう。また同時に、教員側からの声掛けや提出日の告知があった時に急激に数値が上がるのも現実であり、多くの学生に自主的な学習習慣が身につけていないことは明らかである。そういった技術面でのハードルを下げ、自主的かつ安定した取り組みができるようなプログラムやツールの構築・開発が今後の課題である。

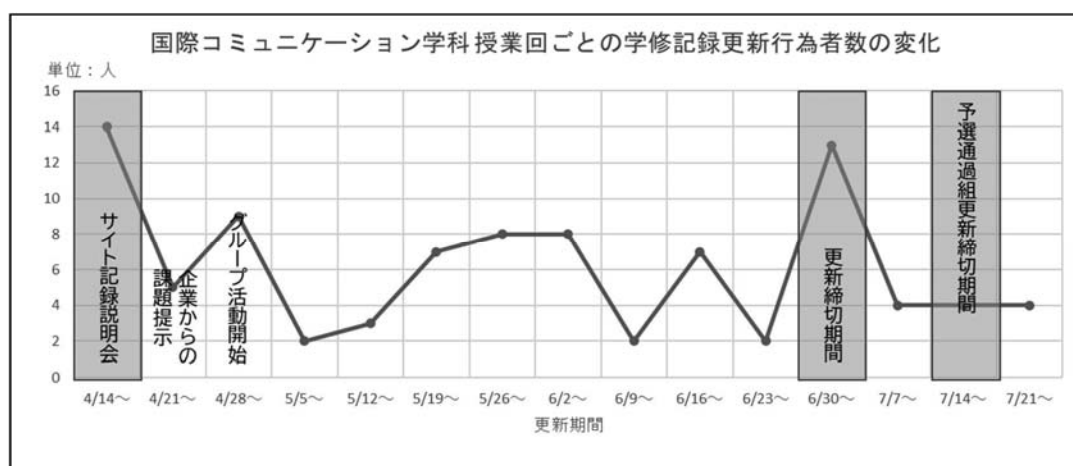


図4-7 国際コミュニケーション学科 授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化

## 4-2. 学生の記録達成度（質的な記録分析）

### 4-2-1. 服飾芸術科

最終的な記録回数が規定の回数を達していたとしても、提出者が必ずしも与えられた課題をすべて理想的にこなしているとはいえない。

提出内容を確認すると「6回目までの記録はあるが写真は1枚のみ（いつの写真か不明）」といったものや、「タイトル、写真はあるが本文なし、最後のまとめもなし」、全体のまとめの記録はあるが全10回の記録のうち4回分の記録がないものが複数、そしてそもそも提出者側と Google サイトが「共有されていないため確認できない」というものもあった。

さらに、予選通過学生と予選非通過学生全体を見たとき、提出内容不備の理由33件中、パソコン操作に関するものが散見された。「写真なし」が15件と最も多く、次いで前出の「共有されていないため確認できない」5件、「サイトが開けないためスライドで作成した」と学生から申告してきたものが1件であった。「写真なし」は、パソコン技術が伴わないからか、素材がそろわないからか不明のため一概にパソコン技術に関わるものとはいえないが、今後注視したい内容である。

### 4-2-2. 食物栄養科

Google サイトの完成においては、図2-2にあるように、・タイトルとサイト概要、・各授業回の学習内容の記録として写真と文章、そして・活動を通して身に付いた力についての記載が必要となる。学生は既定の回数の記録を満たしながらも、そのすべての要素において十分に満たしていたわけではない。

各キャンパスアドバイザーが挙げた記録における質的不足事項としては、部分的に「写真なし」が7件あった。また同じ写真を繰り返し使っているという報告もあがっている。記録に使用する写真に関しては、毎時教員側からグループワークの写真や企業の方の説明写真・資料などを提供していたが、「6/2～」の授業より教員提供型から自分で用意する指導に切り替え、自分たちで活動の風景や話し合いのメモ、あるいは試作品などを撮影させた。その切り替え期である「6/2～」の回では記録行動が一時的に上昇したが、その後「6/30～」の回（締切り

期日の前の回）まで下降傾向にあった。こうした記録材料の準備に関しても自立的行為を苦手とする様子が垣間見られた。

### 4-2-3. 国際コミュニケーション学科

Google サイトを構成する要素の満たし方に着目すると、ある課題が発見できる。Google サイトの学修記録では、毎回の記録の他に、サイトの最初に掲載する「タイトルとサイト概要」、および最後に「活動を通して身に付いた力」を掲載するセクションがある。その最初と最後の取り組み度に若干の違いが生じた。サイトの初めに載せるタイトルとサイト概要においては、分析対象者94人中89名（95%）の学生が記載をしているが、最後の「身に付いた力」の部分は、94人中60人（64%）の学生の記載に留まった。その差約30%の背景を探るためには、より多くのデータが必要となるため、現在その要因を特定することは難しい。しかし、教員側の指示の出し方に着目すると、要因の一つが見えてくる。サイトの概要紹介文に関しては、かなり完成された例文を学生に見せ、このような文章を記載するとよいと指導し、多くの学生がそれに倣って入力した傾向にある。しかしながら、最後の「身に付いた力」に関しては、ある程度の例文を提示したものの、個々によって得た力は異なるため、自身の活動を振り返りながら分析して書くよう指導を行った。同じ文章の執筆であっても、模倣と分析では学生の負担と難易度が異なるため、こうした結果になったのではないかと考える。学生には自己評価基準表（図4-8）を配布し、ここに書かれている項目を基準に自己の成長を測り、またこの表で用いられている言葉を使って、表の下方にある、「チーム内での自分に合った役割とその理由」および「個人のふりかえり」を書かせる指導をし、この内容を Google サイトの最後に記す「身に付いた力」にも活用するよう指示を出した。こうした分析や語彙を選んでいく過程が多くなる分、創造力が必要とされ、そうしたところから手が止まってしまい Google サイトへの記録にまで及ばなかったと推測できる。

| 戸板ゼミナール(前期)産学連携×プレゼンテーション 自己評価基準  |  |  |  |       |       |      |    |
|---|--|--|--|-------|-------|------|----|
|   | レベルA   | レベルB   | レベルC                                       |       |       |      |    |
| 1 実行力   | 全員と協力する姿勢をとりながら、課題達成に向け、詳細、前向きに話し合いと作業に取り組んだ。  | なじめない時間もあつたが、おたおた前向きに話し合いと課題に取り組んだ。                                      | あまり前向きに課題に取り組めず、話し合いと作業も思ったように参加できなかった。    |       |       |      |    |
| 2 協働力   | 発言内容の正確や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解したり、自分の考え方の違いを発見したりするよう努めるとともに、あいづちをうつなど、フーズしやうい音読をつくることができた。 | Zoomと対面の繰り返しというコミュニケーションをとるのが難しい中で、笑顔でうなずいたり、仲間の発言を素直に聴いたりする態度をとることができた。 | 仲間の発言は聞いていたが、あまり積極的に聞いていたとは言えない態度だった。      |       |       |      |    |
| 3 責任力   | 積極的に発言した。伝えたいことが正確に行われるように、わかりやすく、かつ、相手に不快感を感じさせないことになんかすることができた。                          | 伝えたいことが明確に伝わらない、あるいは、一人で話し続けてしまうなどの態度をあらわしたが、改善する努力をした。                  | あまり発言はできなかった。                              |       |       |      |    |
| 4 計画力   | 作業に優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てることができた。進捗状況や時間配分など、常に全体を考慮しながら参加できた。                                | 作業の計画や優先順位、進捗状況、時間配分等については、ときどき考慮しながら行動することができた。                         | 作業の計画や優先順位、進捗状況、時間配分等については、仲間にかまけなかった。     |       |       |      |    |
| 5 協働力   | 自分が果たすべき役割の役割、仲間それぞれの役割を理解して、全体を見ながら行動できた。   | 自分の役割の中でできることを、そのときどきで見つけ、チームに貢献できるように努力した。                              | 自分がやるべきことをつかみきれず、仲間についていくだけで精一杯だった。        |       |       |      |    |
| 6 責任  | さまざまな意見を少しづつ活かして議論したり、新しいアイデアを出すことにも努め、グループワーク全体がスムーズに運ぶような参加の仕方ができた。                      | さまざまな意見がうまくまとまらないうちに、改善する時は改善し、受け入れるときは受け入れ、自分なりに努力した。                   | さまざまな意見をどうすればよいのか知り、何らの行動をとることがほとんどできなかった。 |       |       |      |    |
| チーム内で自分に合った役割とその理由  |  |  |  |       |       |      |    |
| 個人のふりかえり(上記の自己評価を参考にまとめてみよう)  |  |  |  |       |       |      |    |
| <table border="1" style="width:100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width:25%;">食物栄養科</td> <td style="width:25%;">グループ名</td> <td style="width:25%;">学級番号</td> <td style="width:25%;">氏名</td> </tr> </table> |  |  |  | 食物栄養科 | グループ名 | 学級番号 | 氏名 |
| 食物栄養科   | グループ名  | 学級番号   | 氏名   |       |       |      |    |

表 4-8 戸板ゼミナール（前期）自己評価基準表

## 5. キャンパスアドバイザーの視点から見た学修記録支援の意義

今回の「Google サイトを活用した学修記録への挑戦」の実現は、本学キャンパスアドバイザーの協力によるところが大きい。各学科のキャンパスアドバイザーが担当学生の Google サイトを共有し、記録の怠りなどに対し、学生へ働きかけを行ってくれたからである（第2章第4節参照）。この支援なくして8人の総合教養センターの教員と助手だけでは、467名の学生に活動記録を促すのは困難を極めたと予測される。

この項目では、Google サイトに活動の記録を残し、またそれに対する支援を行うことが、キャンパスアドバイザーにとって学生生活支援の一助になり得たかという側面を考察したい。

「戸板ゼミナール1」の指導がすべて終わった後、キャンパスアドバイザー27名に対し、学生支援上での Google サイトの学修記録の価値を問うアンケート（無記名）を行った（アンケート回答者は14名。回答率51%）。アンケート項目および回答結果は以下のとおりである。

問1) キャンパスアドバイザーとして学生支援をしていくうえで、Google サイトの存在は、支援上の補助ツールとして役立ったと思いますか。

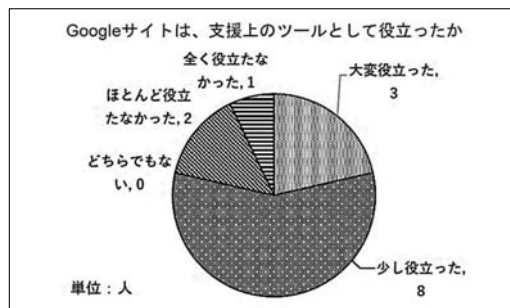


図 5-1 Google サイトは支援上のツールとして役立ったか

問2) 前期の学生支援中、戸板ゼミナール1における Google サイトの指導目的の意図はご理解いただいていたか。

【指導目的】学生が自身の活動を見える形で記録に残すことにより、自身の実績を自認しやすくするとともに、将来「ガクチカ（学生時代に力を入れていたこと）」に活かしたり、就職活動時、企業に活動をビジュアル的にプレゼンテーションすることに活かしたりすることを目的に行われた。

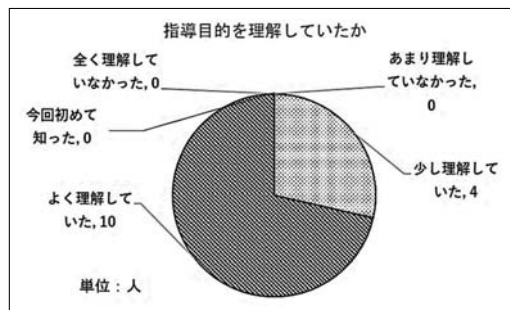


図 5-2 指導目的を理解していたか

問3) 支援期間中に何回程度、学生の Google サイトを閲覧しましたか。

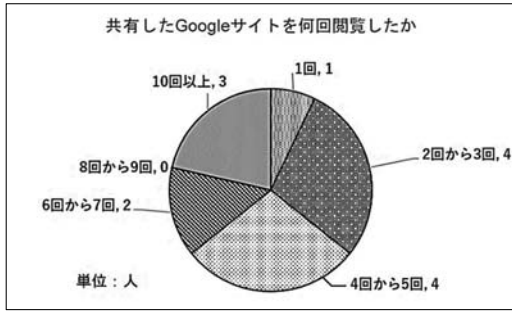


図5-3 共有した Google サイトを何回閲覧したか

問4) キャンパスアドバイザーとして学生を支援していくにあたり、戸板ゼミナールだけではなく全授業にあたり、どのような学習記録があると学生支援がよりスムーズに（あるいは効果的に）進められると思いますか。手法・システム等ご自由に意見をご記入ください。（任意記入）（回答内容に関しては表5-4を

参照のこと。）

約8割のキャンパスアドバイザーが、Google サイトでの学修記録が学生支援上で何らかの役に立ったと回答している。

支援期間中（前学期）の閲覧回数に関しては（図5-3）、回答に散らばりが出た。これは、総合教養センターからキャンパスアドバイザーに学修記録支援の方針を明確に打ち出していなかったことが一因として考えられる。

こうした中、大変役に立った・少し役に立ったと回答したキャンパスアドバイザーの支援期間中の平均閲覧回数が5.46回であるのに対し、ほとんど役立たなかった・全く役立たなかったと回答したキャンパスアドバイザーの平均閲覧回数は2.34回で、2倍以上の差が生じていることがわかった。こうした点から考察すると、学生の記録に触れる回数が多いと学生支援への契機が掴みやすくなり、それに連動し、支援上の学修記録そのものの価値が高まるといった傾向が読み取れる。こうした傾向を精査しながら支援の基準と価値を明確にしていくことが、今後の学

|  |
|--|
| ● 今回の Google サイトの活用は短大ガクチカの可視化や IT リテラシー等を高める効果として大変大きな効果があると感じました。一方で、「授業課題を提出する」という作業の一環にしかならず、学生への意図の理解浸透やモチベーションの格差が大きく出てしまったのが少し残念です。次年度の更なる運用改善に期待したいです。   |
| ● 不明点や疑問点なども記録があればより支援ができるかと思います   |
| ● 学生自身が Google サイトを利用して、促しても 1 人、2 人がする程度で、最後にまとめて行っていた状態であったので日々の学修記録ではなかったように感じました。  |
| ● スキルがない学生でも手軽に利用できるツールが必要と思います。今の学生は視覚的なものに惹かれる性質があるので、個人的なアカウントとは別に作成するインスタグラム等に写真や動画を UP するような形式が一番無理ないのではないのでしょうか。   |
| ● キャンパスアドバイザーとして、全授業の学習支援を行う事はスキル・経験的に難しいのではないかと思います。逆に、算数（数学）や国語（文章作成）等の基礎レベルであれば、できるのではないかと思います。   |
| ● Google サイトは、とても有効な手法だと思います。ただ、コンスタントに記録を出している学生は少なく、締め切り間際にまとめて記録していました。授業の最後に、記録する時間を必ずつくる等が良いのかな、と思います。  |
| ● これまでは個人面接、グループ面接でも口頭のみで指導を行ってきました。ただし口頭で面接 & 注意しただけでは学生の記憶に残りにくく、またインパクトも弱いので、指導内容を可視化することは有益だと思います。学習記録としては「初年次生」であることを念頭に、シンプルでわかりやすいもの、一少ない文字数と画像、が良いと思いましたので、今回の Google サイトの資料は、そういった観点からふさわしい資料だと思っています。さらに達成度がグラフなどで表示されると、学生の意識づけに効果があるのかもしれませんが。学生の PC 操作の力が弱いと変な苦手意識がでてしまうので、苦手な学生のために手書きバージョンも用意する？などの作戦もあるといいのかもしれないと思いました。 |

表5-4 学習記録の手法・システムに関する意見

修記録支援の課題である。

## 6. 今後への課題

### 6-1. 学修記録に対する目標の明確化

今回、学生に学修記録が課された「戸板ゼミナール1」のシラバスにおける学習成果・到達目標・基準は、第一目標である「A：主体性・チームワーク・責任感 ものごとに対する興味と問題意識を持ち、仲間とともに積極的に課題に取り組むことができる」と、第二目標である「C：思考力・判断力 そのときどきの状況を理解し、適切な判断のもとに行動することができる」の二項目で設定されている。この目標を達成した際の学修成果としては、「ひとつひとつの課題に最後まで真摯に取り組むことができる」ようになること、そして、「そのときどきの状況で適切とされる行動が何かを考える習慣を身につける」と提示している。

この目標設定に対し、学生の目標達成自己評価として、7割以上達成したと判断したものが88% (281人) 存在した。(授業に関する学生の意識調査、2022年7/27集計、回答者320人 戸板女子短期大学)

| 目標達成度     | 割合  | 人数   |
|-----------|-----|------|
| 100%～90%  | 22% | 70人  |
| 90%未満～80% | 37% | 118人 |
| 80%未満～70% | 29% | 93人  |
| 70%未満～60% | 10% | 32人  |
| 60%未満     | 2%  | 7人   |

表6-1 授業に関する学生の意識調査 戸板ゼミナール1 (抜粋)

確かに、授業の核となる産学連携企画の課題解決学習に対しては、どのグループも最終的に企画発表まで到達することができており、実質的な目標を達成しているといえる。しかしながら、Google サイトの学修記録に関しては、第4章における各学科の「授業回ごとの学修記録更新行為者数の変化」の報告を見てもわかるように、授業期間の前半と後半に記録行為が集中しており、継続的かつ自律的に学習記録活動が行われたとはいえない。こうした背景には、学修記録に対する具体的な行動目標を明確に提

示できなかった事実があることは否めない。そのため、教員側もその目標の到達を支援する十分な行動に至らなかったという負の連鎖が起きてしまったことも確かである。こうしたことを踏まえ、「自律的」な学修記録を目指すうえで若干の矛盾を含むことになるが、まだ大学の能動的な学びに慣れていない初年次前期は定期的に「学習記録の締切日」、つまり「短期間の行動目標」を設け、記録を残すことへの習慣化を図る目標を、科目本来の目標とリンク付け、設定することが必要であると考えられる。

### 6-2. 測定や評価基準の設定

学生自らが Google サイトを使い学修記録をまとめるにあたって、規定や短期間の行動目標を決める必要性は先に論じたが、その目標を定めたからにはその到達度を評価する必要性も生じる。その評価基準に対しては、

- 定期的な記録締切日に対して、更新期日を守っているか
  - 全体の記録回数を満たしているか
- といった定量的な測定基準を設定することが必要である。さらにその記録の内容において、
- 記録すべき項目を満たしているか
  - 記録内容にふさわしい写真を使っているか
  - その学習回で得た力、他者の考え方の発見などを文章で表現できているか

などの定性的な測定基準も必要となる。

今後、学修記録を学修成果へとつなげていくためには、定量的かつ定性的な2面から評価基準を設定し、自身の学修記録で、何が達成できて何が不足しているのかを、自認はもちろん他者から見てもわかるように評していくことが大切である。しかしながら、今回の学修記録への挑戦においては、定量的にも定性的にも学生への評価基準の設定が曖昧であり、ゆえに評価も定量的な部分に多分に寄ってしまった傾向にある。そうした意味では、今回の「Google サイトを活用した学修記録への挑戦」は、学修成果へとつないでいくにはまだまだ不十分などが多い。今後、こうした課題を解決していくことが、この学修記録を学修成果のエビデンスへと発展させる鍵になると考える。

### 6-3. パソコン操作力の強化

この項では、Google サイトを使って学修記録をするうえで欠かせない、学生のパソコン操作力について考察と課題を呈したい。

今回学修記録を残すうえで、学生が Google サイトの操作方法を習得することは避けて通れない。そのために、「戸板ゼミナール1」の1コマ分を使用して、次の手順で操作指導を行った。

- ①Google サイトの起動の仕方を習得する。
- ②タイトルスペースに、文字を入力し、文字の大きさなどの編集方法を習得する。
- ③セクションスペースに画像を配置し拡大縮小する方法を習得する。
- ④セクションスペースに文字を入力し、文字の大きさなどの編集方法を習得する。
- ⑤過去に作ったセクションスペースをコピーし、画像や文字などの内容を変更し、新たなセクションを作成する方法を習得する。
- ⑥データをキャンパスアドバイザーと共有する設定方法を習得する。
- ⑦一度閉じたデータを、再度開く方法を習得する。

また、③の画像を配置する際には、クラウドドライブから画像を呼び出す必要があることから、

- ⑧クラウドドライブ (Google ドライブ) の意味と役割
- ⑨スマートフォンから Google ドライブへ画像をアップロードする方法

の2点を理解および習得させる必要があった。

1回の指導単体で見た場合、手順を追って説明をしていけば、アプリの操作方法やアップロード自体に困惑する学生は、ほとんどいなかった。しかしながら、1週間から2週間の時を経ると、その操作方法自体を忘れてしまう、あるいは一部の操作プロセスが欠損していく学生が各学科で多く発生した。

特に、使用する画像 (スマートフォンで撮影した画像) を Google ドライブにアップし、そこから写真を呼び出してサイトに貼る、という工程が学生にとってはなかなか「覚えられない」操作であった。スマートフォン単体で画像を SNS にアップすることは容易にできる学生であっても、それをパソコン経由で行うとなるとスマートフォンの画像をどうやっ

てパソコンで扱えばよいのか戸惑う学生が存在したことは確かである。

学生にとって慣れていない操作方法を、一度教えるに留めることなく、短期間で繰り返し行っていくことが必要と考え、今後は一度だけの一斉指導ではなく、しばらくは授業終盤に必ず操作方法から指導をする時間を設けることを検討したい。

なお、逆の発想で、学修記録の習慣を付けさせるという側面を重視させるならば、パソコンの操作に関しては敢えてハードルを下げて実施するという意見もキャンパスアドバイザーから寄せられている。学生が使用する SNS レベルで学修記録が簡単にできるツールを見つけることも今後の一つの課題としてあげることができよう。

### 6-4. 学修記録指導の仕組みづくり

学生が速やかに学修記録に取り組み、かつその結果を学修成果として成立させるためには、①科目の学修目標とリンクさせた学修記録目標の設定、②その目標に対する測定方法と評価基準の設定、③より学修記録を行いやすい使用ツールの選択およびツールに対する操作指導の充実化、以上3点を強化すべきことが明確となった。こうした課題の解決と環境を構築していくうえで、さらに重要な事項があると我々は考える。

それは、「機会」の提供である。

学習活動自体を自律的に継続できない傾向にある初年次学生に対して、「学んだことを記録する」機会を指導者である教員が定期的に設け、それを習慣化する仕組みを作る必要がある。今回、学生の行動パターンとして、「教員からの声掛け」、「授業時に操作ツールに触れること」、「締切日の設定」、「グループワーク中の学生同士の教え合い」が学生の学修記録に対する意識を高める効果があることが明確となった。これらの要素を半期の教科指導の中にタイミングよく組み入れ、本来の科目学習項目の習熟にも効果的に働くような、学習を振り返る「機会」提供の仕組みを作ることで、質と量が伴った学修記録が可能になると考える。



## 6-5. 教学マネジメント上における価値のあり方

第1章第2節「学修成果の可視化」と「戸板ゼミナール1」の関係で触れたとおり、今回の Google サイトを活用しての学修記録は、教学マネジメントの大きな流れの一部として位置づけることができる。そして、教学マネジメント上での価値は、評価のエビデンスとなり得ることである。学修成果とするためには、まず「評価」が必要であり、そのためには評価基準が必要となる。グループワークを主とした問題解決型学習の多くは、ループリックを構築し、自己評価やコミュニティ内の相互評価によって「評価」が決められていくケースが多い。また教室という場を離れた、教員が触れにくい場での活動も多く、教員が評価をどこまで正確に判断できるか、判断に困る教員も多いだろう。そうした中で、学修記録を残していくことは、自己評価や相互評価以外の評価基準を得ることにもなる。こうした評価基準の多様化は、学修成果をより多角的に提示できることにも繋がっていくであろう。

こうした学修記録は、Google サイトのような視覚的表現で実施すれば、就職活動時の自身の学習活動をわかりやすく伝えるツールにも成り得る。さらにはカリキュラムポリシーや、ディプロマポリシーの具体的根拠、および結果を提示できる資料ともなり得る。また、個人情報厳守したうえで公開できれば、それは大学におけるアドミッションポリシーの根拠にも成り得るのである。

### おわりに

今後、よりわかりやすい学修成果を内外に提示していくためには、数値的な成績評価の集合体ではなく、大学教学マネジメント上のエビデンスとなる学修記録の可視化を追い求める必要があると我々は捉える。近い将来、より充実した学修記録の可視化を実現させるためには、先に挙げた、目標の設定・測定と評価の基準・記録ツールの選定・ツール操作力の向上・機会の提供と仕組みづくり等、課題は山積みといえよう。

なお、こうした挑戦は、学校全体の教職員の支えなくしては実現が不可能である。今回 Google サイトにおける学修記録を実行するにあたっては、各学科

のキャンパスアドバイザーの存在なくしては実現できないことであった。また、各種データの取りまとめやセンターに来室した学生への指導補助の中心となって動いた助手たちの存在も大きい。こうした関係各位に深く感謝を伝えたい。また、「戸板ゼミナール1」予選発表の際に各学科の教員・助手の皆様にご支援いただいたことにも、感謝の意を表したい。

次年度（令和5年度）より「戸板ゼミナール1」は、その存在を残しつつも、さらなる発展科目として「産官学連携ゼミナール」という科目を誕生させる。この科目においても、本稿で取り上げた課題の解決策を丁寧に吟味し、より充実した学修記録を提示できるようにしたい。そしてその結果、学生自身の学習能力向上はもとより、教職員による学生支援や各学科ゼミナール等、戸板女子短期大学における学修全体の充実につなげることができるよう、取り組んでいきたい。

### 参考文献

- i 中央教育審議会大学分科会 教学マネジメント特別委員会（第3回）資料3「教学マネジメントについて（案）」、[https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt\\_daigakuc03-000001503\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt_daigakuc03-000001503_4.pdf)（2022年11月19日閲覧）
- ii 中央教育審議会大学分科会 教学マネジメント特別委員会（第12回）資料5「教学マネジメント指針 用語解説（案）」、[https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt\\_daigakuc03-000003869\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_daigakuc03-000003869_9.pdf)（2022年11月19日閲覧）
- iii 中央教育審議会大学分科会 教学マネジメント特別委員会（第3回）資料3「教学マネジメントについて（案）」、[https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt\\_daigakuc03-000001503\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt_daigakuc03-000001503_4.pdf)（2022年11月19日閲覧）
- iv 中央教育審議会大学分科会 教学マネジメント特別委員会（第3回）資料3「教学マネジメントについて（案）」、[https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt\\_daigakuc03-000001503\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt_daigakuc03-000001503_4.pdf)

(2022年11月19日閲覧) より抜粋引用

v Google Workspace ラーニングセンター「Google  
サイトでできること」[https://support.google.com/a/  
users/answer/9314941?hl=ja](https://support.google.com/a/users/answer/9314941?hl=ja) (2022年12月2日閲覧)